



# 神明貝塚

水辺と森に育まれた縄文のムラ

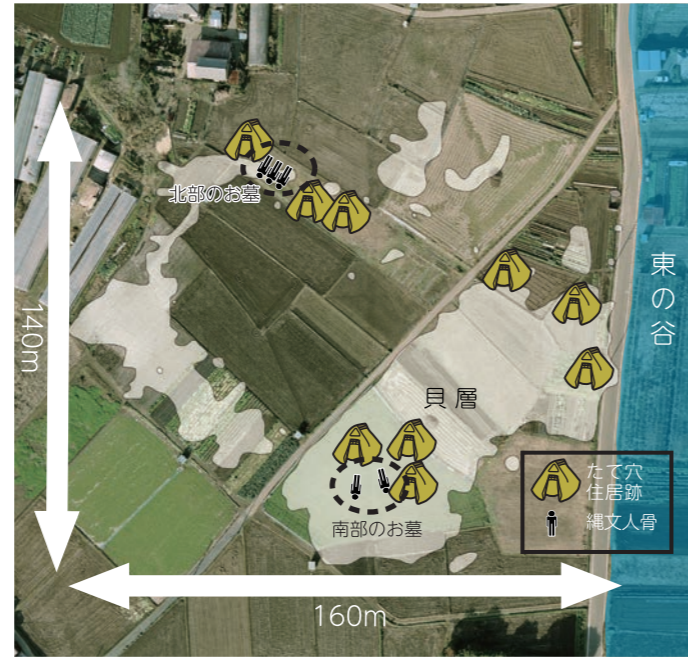


# 神明貝塚がつくられたころ

神明貝塚は春日部市北東部の西親野井地区にある貝塚です。東西160m、南北140mのドーナツ型に貝殻や動物の骨が広がっています。



貝塚に眠る貝殻・骨



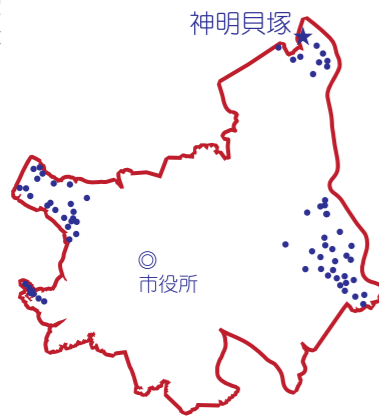
6000~5000年前 埼玉県に多くの貝塚がつくられたころ  
4000~3000年前 神明貝塚がつくられたころ



● 海に住む貝の貝塚 ○ 川や沼、湖に住む貝の貝塚  
● 貝塚分布から想定した川と海の水が混じるところ(汽水域) 0 km 20

## 東京湾の海岸線と貝塚分布の変化

(樋泉1999を基にさいたま市立博物館2014、埼葛地区文化財担当者会2007、品川区立歴史館2007、神奈川県考古学会2009、古河市史編さん委員会1985、財団法人千葉県史料研究財団2004、小杉1989を参照して作成)



春日部市内の縄文時代のムラ

春日部市には3万年前の旧石器時代から人々が住みはじめました。

その後、縄文時代に入り、6千年前には今よりも暖かい気候となり、海面が上昇して、春日部市には奥東京湾と呼ばれる海が広がっていました。そのころから、市内には縄文人のムラが数多くつくり、海にすむアサリやハマグリ、カキ、ハイガイといった貝をとって食べていました。4千年前には海面が下がり、神明貝塚の周囲は、川の水と海の水が混じり合う、湖や河口などの汽水域のある環境となりました。

# 神明貝塚の食生活



神明貝塚では主に汽水域にすむヤマトシジミという貝や、淡水魚のコイ、ウナギ、汽水域にもすむイワシ、フグなどの海水魚を食料としていました。



貝や魚の他、イノシシやシカなどの動物も捕まえており、狩猟具である弓矢の矢じりも発見されています。



木の実を加工する石器



狩猟のための石器



神明貝塚の東には小さな谷があり、縄文人はそこから舟で、汽水域まで漁に出たようです。



神明貝塚の貝殻の種類



神明貝塚からは、クリやクルミ、トチノミなどの木の実の殻が非常に多く発掘されています。神明貝塚の縄文人の骨のコーラーゲンには、植物由来の成分が多く含まれており、植物が中心の食生活と推測されています。また、アズキやダイズなどの豆も発見され、野生種よりも大きいことから、縄文人がそれらを栽培していた可能性があります。

# 神明貝塚のムラの景観

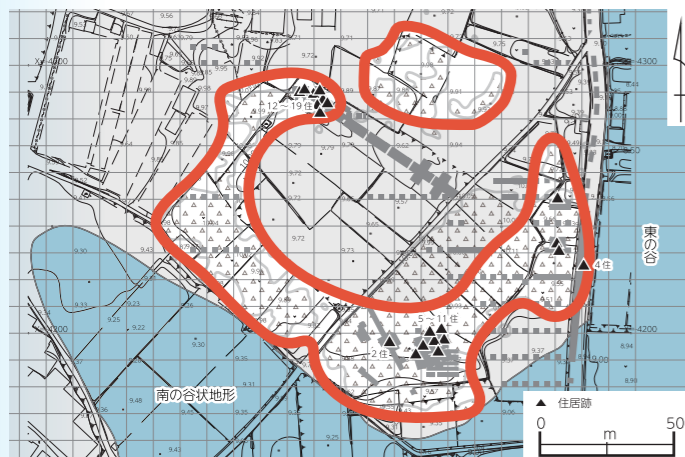
現在の神明貝塚は、田畑として利用され、地表にはたくさんの貝殻が広がっています。地表から20cmほど掘り下げると、貝殻の層が20~60cmの厚さで堆積しています。縄文人が300年間という年月をかけて、貝や魚、動物を食べ、その貝殻や骨が積もったものです。貝殻の層の下には縄文人のイエや墓が見つかり、そこが縄文人のムラの跡であることがわかります。



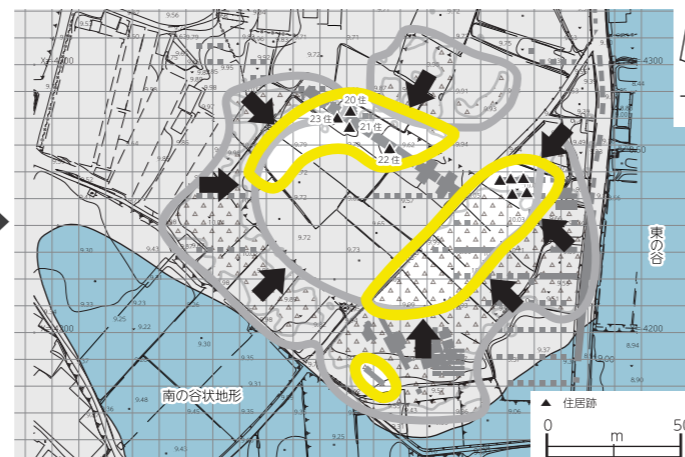
貝殻の層 厚さは約60cmもある



しかし、ムラの景観は300年間、同じではなかったようです。前半期のイエは貝塚の外側に、後半期のイエは内側に分布します。これは関東地方の同じ時期の貝塚にもみられる現象であることから、神明貝塚の景観はこの時期の特徴的なムラの姿といえます。



前半期(3800年前ごろ)のムラの範囲



後半期(3500年前ごろ)のムラの範囲

縄文人のムラは、神明貝塚のようにドーナツ型になる例が多くみられます。おそらく、中央にムラの広場があり、それを取り囲むようにイエや墓がつくられました。

ムラの周囲には、縄文人が利用した緑豊かな自然がありました。東の谷の地質調査では、神明貝塚周辺にはクリ林が広がっていたことが推測されています。



縄文人の墓(右:3号人骨 左:4号人骨)



たき火跡

神明貝塚では、イエは何度も建替えや移転が行われ、使われなくなったイエの跡には墓やたき火の跡がつくれ、最後には貝殻や骨が堆積しました。たき火の跡は、作業場や祭祀の場と考えられます。



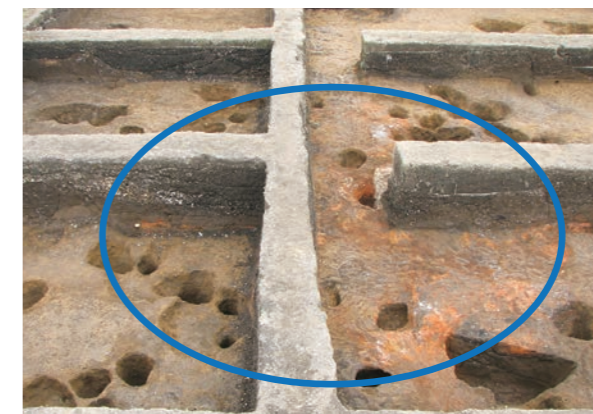
方形の竪穴住居跡(3500年前)



いろいろ 灰は入っていない

縄文人のイエは地面を掘りくぼめて屋根を掛けるもので、<sup>たてあな</sup>竪穴住居と呼ばれています。

神明貝塚では2種類の竪穴住居が発見されました。ムラの前半期は直径6m程度の円形、後半期は1辺4m程度の方形でした。また、円形の竪穴住居はいろいろが強く火を受けて赤化し、灰が厚く溜まっています。方形の竪穴住居のいろいろには灰はなく、イエの構造といろいろの使い方に違いがみられます。



円形の竪穴住居跡(3800年前)



いろいろ 灰が厚く溜まる

縄文人はクリの実を食べるだけでなく、クリの木そのものをイエの建材として利用していました。貝塚の南部では竪穴住居の屋根が焼け残った状態で発見されました。焼け跡には炭化した木材が多く残り、そのほとんどがクリの木でした。



屋根が焼け残った竪穴住居跡



焼け残った屋根の一部 炭になった木材と焼けた土が重なっている

## 神明貝塚の縄文人

神明貝塚で発見された5体の人骨は、30～60歳ぐらいの成人です。いずれも頭を南向きに埋葬されており、死者の甲いに一定のルールがありました。また、人骨の近くから土偶や石棒が発掘され、死者を弔うために副葬されたものと推測されます。



5号人骨

5号人骨は壮年から熟年の女性で、両手を左胸の上に合わせるように埋葬されていました。この女性は右手首にサトウガイという外海にすむ貝で作られたブレスレットを、右耳にサメの背骨で作られたピアスを身につけていました。

左：神明貝塚5号人骨（縄文時代）

右：内牧公園（坊荒句遺跡）の人骨（江戸時代）

神明貝塚の5号人骨は、江戸時代の人骨と比べると丸顔で彫りが深い。



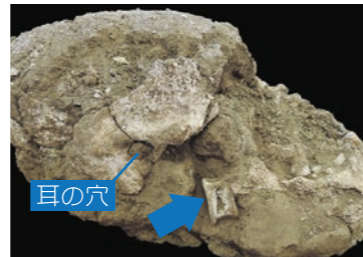
5号人骨の上から発掘された土偶



3号人骨の膝の下にあった石棒



5号人骨の右手首  
白い輪が貝のブレスレット



5号人骨の右側頭部  
矢印の先が骨のピアス



5号人骨の貝のブレスレット



サメの背骨のピアス  
赤く着色されている



## 神明貝塚の地域性と遠隔地との交流



神明貝塚前半期（3800年前ごろ）の土器



神明貝塚後半期（3500年前ごろ）の土器

神明貝塚から発掘された土器は、大きく2つに分けられます。ムラの前半期につくられた土器はバケツ形をしているものが多く、後半期につくられた土器は、浅い鉢形のものなど形態が様々です。これらの土器は関東地方に広くみられ、神明貝塚が関東地方の貝塚群の一翼を担っていることがわかります。

一方、東北地方北部の影響を受けた土器や、新潟県糸魚川地方で産出されるヒスイで作られたアクセサリも発掘されています。神明貝塚の人々が、遠方の地域と交流していたことが推測されます。



東北地方北部の影響の土器  
上下に分かれる



ヒスイのアクセサリ



(国土地理院色別標高図に加筆)

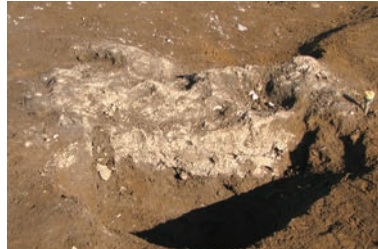
## 縄文人のたき火跡



焼土の上に堆積する灰

住居のいろいろの灰を分析したところ、海浜に生育するアマモなどの海草に付着する微小な生物が検出されました。それらは古代の塩づくりの遺跡から発見されることが多く、神明貝塚の灰も塩づくりと関連したものと推測されます。今後、分析が進み、縄文人の様々な<sup>なりわい</sup>生業が明らかとなるでしょう。

神明貝塚前半期の住居のいろいろと、屋外のたき火の跡には、いくつかの共通点があります。どちらも、強く火がたかれて赤く硬化し、灰が厚く溜まっています。また、神明貝塚ではたき火跡のほかにも、灰を溜めた穴や、内部に灰の塊が入った土器も発見されました。



灰を溜めた穴



灰が納められた土器



アマモ

## 神明貝塚の重要性

日本列島の中でも、東京湾沿岸は縄文時代の貝塚が最も多く分布する地域です。そのなかでも、神明貝塚はその最北部に位置し、東京湾沿岸の他の貝塚との共通性をもつ一方で、内陸的な暮らしをしていたことが明らかとなった、貴重な遺跡です。また、ムラの形がほぼ完全な形で保存されており、縄文人の生活や文化を知るためには、欠かすことのできない文化遺産です。

神明貝塚は国民共有の財産として、末永く後世へと伝えていく必要があります。



### アクセス

東武動物公園駅(東武スカイツリーライン)から関宿中央ターミナル行きの朝日バスに乗車、西親野井バス停で下車、徒歩5分 ※駐車場なし

平成30年3月23日発行

編集・発行 春日部市教育委員会 イラスト 石倉 慶子  
印刷 有限会社春光社印刷

